

## ■ ルールー v s ナンパ輪姦@ショタサー

クライアス社に勤めるアンドロイド、ルールー。  
今日は人間のことを良く知るため、社外で調査中であつたのだが……  
人間観察として街を歩いているところに、ある少年たちのグループから話しかけられる。  
ルールーより一回りも二回りも小さな少年は、良く言えば明るく社交的、  
悪く言えば軽薄で馴れ馴れしく、ルールーを取り囲む。

【うわあ、お姉ちゃんスゴい美人だね！ 一人？ 見ない顔だけどここは初めて？  
ならボクたちが案内したげるよー♪】

「誰ですか？ わたしは今 任務中です。邪魔しないでください」

【任務？ なにそれ面白いーい♪】

【ならボクたちも手伝うよ？ 一緒に任務しよー♪】

【ボクたち、あるサークルやっててさ。困ってる人はほっとけないんだよねー】

【邪魔しないからさー、まずはカラオケとかで任務についてお話しよーよ♪】

ルールーの様子を見て不慣れだと思い、道案内しようとしているのだろうか。  
だがルールーにはそのようなガイドは必要ない。  
敬語を使いつつも無機質な態度で突き放そうとするが、少年たちも食い下がる。  
奇妙な相手を見て、冷静に分析するルールーだが……

(この少年たち……ただのナンパである確率九七%……関わる必要性はない。しかし、このお節介さ……)

【まー立ち話もなんだし。ほら行こ、お姉ちゃん♪】

「っ……仕方ありませんね……」

(なぜ断れない？ 理解不能……)

彼らの行動は形だけなら親切なものであり、特に調査すべきプリキュアと僅かに共通点がある。  
少年たちのあどけなさ、可愛らしさもあり、  
ほぼ間違いなくナンパだと分かっている、なぜか断りきれなかった。  
自分の行動が理解できないルールーは、せめて彼らについていく意味を見出そうとこじつけの理由を生み出す。  
万一、何かあつたとしても運動能力の差で何とかなる。  
調査の機会という理由を見出したルールーは、不自然なほど警戒心を薄れさせていたのだった。

(人間の調査ができることには変わりはない。このようなレアケースの調査も人間への深い理解には必要かもしれない。いざとなれば、わたしの能力で対処可能……)

【お姉ちゃん、名前はー？】

「……ルールーです」

【お姉ちゃん行きたいところある？ ないならカラオケでいーよね？】

「はい、構いません。早くいきましょう……」

(これは全て……調査のため……)

◆

【お姉ちゃん、こっち向いてー♪ はいピース♪】

「こうですか？」

【そうそう。無愛想だけどやっぱり可愛いねー♪】

【じゃーカンパイしよー♪】

【カンパーイ♪】

「かんぱーい……」

カラオケに連れ込まれたルールー。  
言われるがまま携帯端末を持つ少年の方を向いて撮影されると、用意されたドリンクで乾杯。  
人間をよく知るためにと、淡々と従っていくが……

少年たちは盛り上がっているものの、歌うつもりがないことに気付く。

「カラオケに来たのに歌わないのですか？」

【歌うだけがカラオケじゃないんだよー】

【それよりさー、お姉ちゃんホント美人だよー。彼氏とかいるの？】

「いいえ、交際相手はいません」

【へー、フリーなんだ。もったいないなあ、こんなに可愛いのに】

なぜか歌わず、他愛のない話を続ける少年たち。

彼らの表情が更に軽薄になったと思うと、会話の内容が露骨なものに変化する。

【じゃあセックスは？ 経験ある？ ていうかオナニーしたことある？】

「わたしには必要ありません」

【えっ、オナニーすらしたことないの？ それ健康に悪いって】

【ならボクらが教えてあげよっか？】

急な性的な話題。そしてルールーが性行為に一切興味がないと知るや、いきなり彼らはルールーの身体……肩や太股に触れてきた。

「触らないでください。必要ないと言ったはずですよ……！」

これで完全に確定する。彼らの狙いはルールーの肉体であることに。

なぜ自分が彼らの性欲対象となるのか、ルールーには理解できないが……理解する必要もない。

もう彼らから学べることはない。早く人間観察の続きをするため、今すぐこの場を離れようとした時。

(彼らは肉体が目当て。であれば、もうここにいる必要はな……)

どさっ！

「っっ?!?!」

身体が急に脱力し、その場に転がるように倒れてしまう。

想定外のエラーに混乱するアンドロイド。彼女に対し、少年がにやついた顔で種明かしする。

【おー、効いてる効いてる♪ 意外と効果出るの早かったね♪】

「あなた、たち……なにを、したの、ですか……」

【さっきカンパイしたよね？ あれに超強力な筋弛緩剤と媚薬、その他もろもろ入れたんだ♪】

【なんか人間らしさがないから効くか不安だったけど、全然問題なかったね。

どう？ えっちな気分になってるでしょ？】

ピースサインを撮影するため横を向いていた隙に、何やら薬品などを仕込まれていたらしい。

乾杯の際のドリンクは全て飲んだわけではない。

しかもルールーは任務をこなすアンドロイドとしてあらゆる症状に耐性が備えられているのだが……

そんな体質など問答無用で脱力させられたようだ。

思わぬ事態に戦闘時とは異なる質の危険を感じるが、やはり手足に力が入らない。

そして上手く動けない彼女を、少年たちが取り囲む。

【お姉ちゃん一人でホイホイついてくるんだもんなー。どうせこういうの期待してたんでしょ？】

【逆らわないなら痛くないからさ。せっかくだし愉しもうよ♪ ほら、パンツ見せて♪ お、もう濡れてる♪】

「有り得ません。わたしにはそのような機能は……」

ぬちゅっ♥♥

「っっ?!」

【ほら、けっこう濡れてるよ♪ 自分でもびっくりした？ クスリの効き目スゴいでしょー♪】

(なぜ、陰部が濡れて……潤滑機能の誤作動？ しかし、この未知の感覚は一体……)

彼らが使った薬品は単に運動能力を奪うだけでなく、未知の感覚……おそらくは性感……をも強制的に与えてくる。無邪気に装い、これを使って女性を興奮させ、事に及ぶ。それが彼らの手口なのだろう。エラーは修正できず、このままではルールーに成す術は無い。だが、ここまで戦力差が逆転していながら、少年たちはルールーから淫行を望むように求めてきた。

【ねー、どうなの？ えっちしたくなかった？】

【お姉ちゃんの口から聞きたいなあー♪ ほら言ってみよ、えっちなことしたいって♪】

「……無駄です。わたしには性欲というものはありません」

【こんなに濡れてるのに？】

「はい。これはただのエラーです。性欲によるものではありません」

【はは、お姉ちゃん面白いなあ♪ ならコレ見てもそんなこと言えるかな？】

「……ペニスを見せるつもりですか？ そんなことをしても、わたしの性欲には何の意味」

ぼろんっ！

「もっ！！」

(ペ……ペニス……！ これほどの大きさは、想定外……！)

ルールーが直接的な発言をしないと分かるや、今度は少年の一人がチャックを下ろして性器を見せる。それに何の意味があるのか。全く理解できなかったが……小柄な少年のものとは思えぬ巨根が飛び出た途端、なぜかルールーの中で疼いていた未知の感覚が一気に増大した。

想定外のサイズに、思わず目を見張る。気を取られる内に手足が押し付けられ、巨根少年にのしかかれる。

【お、顔色変えたね♪ やっぱコレ見せると違うねー、みんなチンポ見たら目の色替えてくるもんなあ♪】

「驚いただけです」

【ほんとに？ 今からコレをブチ込まれるんだよ、ぞくぞくするでしょ？】

「そのようなことは……」

ずくんっ♥

「っ?! あ、ありません……！」

【お、今腰がヒクついた。やっぱり期待してるんだねー♪】

ルールーが媚びないと分かり、やはり少年は無理矢理に性行為を迫ろうとする。非効率な行為をさせられることに不快を感じたルールーだが、少年に言われてペニスを意識すると、未知の感覚はどんどん膨れ上がっていく。

(同様のエラー、確認……！ 理解不能。ペニスのサイズがどうであれ関係ないはず。想定外のサイズに、何かを感じているというの……?!)

巨根と言って差し支えないペニス。それに犯されることを実感すれば、なぜかエラーが止まらない。いつの間にか未知の感情は期待となって、まじまじと巨根を見つめてしまう。心のどこかで挿入を待ち……そこで、少年が避妊具を取り出した。

(お……犯される……！ これ以上のエラーは避けなければ……しかし……っ！)

【ああ、安心してよ、ゴムは付けるから】

「えっ？」

【あれ？ もしかして生ハメしたかった？ お姉ちゃん、とんだドスケベさんだね♪】

「ちがいます！ そのまま挿入するかと思っただけです！」

【やっぱり生チンポ挿れられるの期待してるじゃん♪】

生ハメして欲しかったらいつでも言ってみよ、それまではゴム付けてあげるからさ】

「ですから、期待など……！」

(わたしは何を驚いて……まさか、何のケアもせずに性交することを望んでいたというのですか？ ……有り得ない)

避妊具を付けると知り、まるで生挿入を期待していたかのような驚きの声を出してしまう。

もちろん予想外だったための声のはず。  
自分に言い聞かせるように言い訳する中……いよいよ肉根が宛がわれる。  
とても少年のものとは思えない、振り返った太い巨棒。  
生身の女性であれば、所謂『墮とす』というのが通じるのかもしれないが、  
アンドロイドであるルールーには効かないはず。  
妙な不安を消し、せめて早く済ませよう、ルールーは少年を冷たい視線で見据え……

【じゃー生チンポ期待してるとこ悪いけど、まずはゴム有りてルールーお姉ちゃんのおマンコいただきま〜す♪】

「っ……構いません。やるなら早く済ませてください」  
(逃げ出せないなら早く済ませるしかない。快楽を与えて墮とすことに自信があるようですが……  
今回は少々エラーが出ただけ。そのエラーも既に修正済みのはず……)

【いくよー、せーのっ！】  
(わたしにはこのような行為など……セックスなど、何の意味もありません)

ずぼおっ♥♥  
「おほっ♥♥」  
(え……♥♥ エラー♥♥ 修正不可能……♥♥ り……理解……不能……っ♥♥)

押し潰すような突き入れに、修正したはずのエラーと疼きが肉壺から身体中に駆け回る。  
無感情なはずの双眸は白目を剥く勢いで裏返し、  
気付いた時にはルールーは欲情にまみれた声で啼いてしまっていた。

【あははっ！ なんだ、澄ました顔してたけどブチ込んだら声出すじゃん。やっぱりドスケベマンコなんだね！】

「っ……そんなはずはありません。初めて、ですから……エラーが♥ あぐうっ♥」  
【予想通り、締まりいいねー♪ でも処女じゃないっぼい？  
挿れた途端えらい感じてるし、実はオナニーしまくってたとか？】  
ずぶぶっ♥ ぱんっ♥ ずぶっ♥ ぱちゅんっ♥  
「ですからっ♥ 感じてなど……自慰行為など♥ して、ませんんっ♥♥」  
(何ですか、この感覚は……♥ 避妊具を付けているはずなのに、勝手に声が……エラーが出てしまう……♥  
これが、快楽……♥ これが……セックス……っ♥♥)

言葉では平静を保っているが、内心ルールーは混乱を深めていく。  
今ならハッキリと分かる、性の快楽。  
アンドロイドは余計な快楽など感じないはず。  
なのに少年に秘部を突かれれば突かれるほど、実感できるレベルで快感が高まっていく。  
強力な薬品、雄として優秀なペニス。  
それらが相手とはいえ、一体なぜこれほどのエラーが発生するのか、ルールーには到底理解できない。

【ほらほら、オマンコひくひくしてるよ♪ ホントに感じてないのお？】

ぱんっぱんっぱんっぱんっ♥  
「んっ♥♥ くふうっ♥♥ こっこれはっ♥♥ これも♥♥ ただの♥♥ エラ……あああっ♥♥」  
(ペニスからどンドンエラーが送り込まれてくる♥♥ このペニスはエラーの塊っ♥♥  
言いようのない不快感♥♥ そして……快感……♥♥ 矛盾している♥♥ 有り得ないっ♥♥)

理解できないものに恐怖と嫌悪を覚え、拘束から逃れようとするが、肉壺は快楽に従って少年を締め付ける。  
それがまた少年を愉快にさせ、ルールーの矛盾した昂揚を高めていく。

【何でイヤがるフリするの？ 気持ち良いなら受け入れたらいいじゃん♪】

ぱんっ♥ ずぶうんっ♥  
「んっお♥♥ フリなどではっ♥♥ ありまっ♥♥ おうんっ♥♥ おおおんっ♥♥」

手足、そして肉壺を強く押さえ付けられ、反抗の意志が揺らいでしまう。  
理性ですら逆らえなくなりつつあり、抵抗の力が一段と弱めてしまう。

(なぜ♥♥ もう身体能力は戻っているはず♥♥ 快楽に逆らえなくなっている?!♥♥

有り得ない♥♥ 有り得な……)

ぱんぱんぱんぱんっ♥

「あっ♥♥ んっ♥♥ んおっ♥♥ っほおっ♥♥」

有り得ないずの快感と喘ぎが、身体が揺れるたびに溢れてくる。

喘ぎとしても不自然なほど無様な牝声が出て贅肉のヒクつきが止まらなくなる頃、少年も巨根を震えさせる。

【そろそろ出すよ! ゴムしてるからこのままでいいよね!】

ぱんぱんぱんぱんっ♥♥

「んおっ♥♥ 中で♥♥ 大きくっ♥♥ しゃ、射精するつもりですか♥♥

構いませんっ♥♥ 早くっ♥♥ おほっ♥♥ 終わらせっ♥♥ おおおおっ♥♥」

【あ、そんなに出して欲しいんだ? なら遠慮なくゴム出しするねっ!】

「そんなことっ♥♥ 言ッてませんっ♥♥ 早くおわっ♥♥ 終わらせたいっだけでっ♥♥

あ♥♥ ああひっ♥♥ なっ何かがっ♥♥ 内側から……んむんんんんっ♥♥」

【お姉ちゃんもイキそうなんですよ? ほらイキなよっ、チンポにイカされちゃえっ!】

(性器への刺激により何かが込み上げる感覚♥♥ 理解不能っ♥♥

情報検索……っっ?!♥♥ ぜ、絶頂っ?!♥♥ そんなまさかっ♥♥)

セックス中、内側から強烈に迫る感覚。それを搭載データから検索すると、絶頂という現象に辿り着く。

そこでルーラーの不安は確信に近い状態となり、完全に絶頂を認識してしまう。

もちろん、セックス中に感じる感覚には痛みなどの不快なものもあったのだが……

もう今のルーラーには、快感に繋がるものしか見えなくなっていた。

自分でも分かっているが、それでも頭の中では否定を続けるが……

少年が最後に最奥——子宮に相当する部分を突き上げた時、その思考すら吹き飛ばされた。

「おっ♥♥ おふっ♥♥ イキっ♥♥ イキそうになどっ♥♥ 絶頂などおっ♥♥ んぐおおおおおっ♥♥」

(絶頂っ♥♥ 有り得ないっ♥♥ わたしはアンドロイドっ♥♥ セックスで♥♥

想定外ペニスで性器を刺激されてっ♥♥ 絶頂するなど有り得ない♥♥ 有り得ない♥♥ ありえっ♥♥)

ごづらんっ♥♥

「ふっほおおおおっ♥♥♥♥」

(子宮っ♥♥♥ 押し上げっ♥♥♥)

エラー♥♥♥エラー♥♥♥エラー♥♥♥カメラ異常発生♥♥♥視界♥♥♥点滅し………)

【そらっイッちゃえええっ!】

ドプッ♥♥ ドプンッ♥♥ ドプドプドプドプウウッ♥♥

「お`っ♥♥♥ お`おっ♥♥♥

イッ————んおほおおおおおおおおおおおおおおっ♥♥♥」

(ゴム越しなのに♥♥♥ 熱いのが♥♥♥ 伝わってっ♥♥♥

こ……これが♥♥♥ セックス……♥♥♥ このペニスの……射精………っ♥♥♥)

そしてゴム越しに叩き付けられる大量の精液。

直接注がれないだけに、まるでその感覚は熱湯の塊で殴りつけられたようなものであり、

熱い鈍痛じみた感覚に何度も視界が明滅する。

アンドロイドとしての頑強さがなければ失神も考えられる衝撃に、

ルーラーは熱っぽい吐息を上げるしかできない。

